

桜蔭俳話会 通信句会 (第百回 二十三年冬)

高得点句 自句自解

十一點④

着ぶくれてより福耳の似合ひける 野上 貞勝

着ぶくれてのよりは格助詞を使って「から」とか、又は比げてを現わし、福耳は耳たぶの大きい福相の古老と形が同じように似合うことを強調して下五、切れのけるは過去の事柄を回想した句。ちなみに小生は耳は小さい。

十一點①

禅寺のあり大寒の突きあたり 野上 貞勝

横浜在住の者であれば、直ぐに鎌倉五山の一位建長寺。北鎌倉を下車すれば直行。吟行は再三参詣して句も作りました。記憶をもとに、単純明快に飾らず上五を放った句が一気に詠めました。

十一點①

乳離れの児のほほに付く七日粥 藤本 友子

離乳食の始まった孫は、やはり母乳の魅力に勝てず、母親手作りの食事は今ひとつ進まなかったのです。ところが七種粥は、妙に気に入った様で、喜んで食べている、その仕草が、かわいらしくて句になりました。七種粥は、風邪をはじめ万病除けになるとの謂れ通り、健康に育つよう願いも込めて、作句でした。

十點①

幸せの端にいるらし福笑い 小川名みさ

今年も四世代全員が新しい年を迎えることが出来ました。居間に集まって、カルタ取りを孫を中心に行いました。笑い声にあふれる家族を見ているときにふっと幸せの・・・と浮かびました。最初は幸せの端に「いるらしい」と作句しましたが、まのびするので「いるらし」と変えてみました。

九點①

大寒の夕陽が山を大きくす 小川名梅乃

この冬の寒さは例年にない程の厳寒であった。大寒のころが一人の寒さであったが、大山、丹沢連峰の稜線がくつきり見えた。ビルの高台から見る夕陽は息を呑む程美しく、大自然の荘厳さは感動あるのみ。大自然の恩恵に心の糧を得た思いだった。夕陽が沈む

とその山々がシルエットとなって大きくクローズアップされた。山を囲む木々や建物が取り払われた時、更に山全体が大きく見えた。眼前の大きな山を見て圧倒された思いだった。やがてその山々も闇の中に消えて、日没の衰れさが身に迫ってきた。

八点①

水鉢の薄氷小さき天映す

小川名梅乃

日常生活の中で、一触即発的にひらりと出来た一句。一句を成す時には少しでも上手に詠みたいと智が働く。焦点は？感動は？と自由な発想を妨げる事が多い。寒の朝うっかり見過ごしてしまうところを新奇な風情に遭遇。庭の一隅の水鉢にしつかりと薄氷が張っていた。じつと眺めていると、真つ青な空が映っていた。さながら、生きて在すごとくキラキラと光を発していた。自然が造りなす様に深く心を動かされた時の一句。

八点

悴む手に診察券の多さかな

平井 与史

高齢となり、指の関節も変形し、痛みもある。その上、今年は寒さが厳しかった。現在、かかっている病、医院は七、八ヶ所。診察券を取り出すことも容易ではない。

七点

終い風呂柚子のすき間の手足かな

小川名みさ

去年は我が家の柚子は出来が悪い上、道路添いにあるので持ってゆかれたりし、少なかつたのですが、その分友人が沢山持参してくれました。贅沢にも柚子を思いきり風呂に入れてみました。主婦はどうしても終い風呂になりますが、柚子の香りでもとても幸せの気分になりました。友人に感謝、感謝です。

六点③

入院の窓初富士を独り占め

平井 与史

肺疾患で金沢八景近くの市大病院に入院し、不眠症もあつて個室にいらしてもらった。はるか丹沢山塊の彼方に雪の富士が窓一杯に広がっていた。俳話会で金沢文庫、野島公園に吟行したことを、懐かしく思い出していた。

六点①

冬満月枯山水を渡りゆく

小川名みさ

泉区の長屋門公園とその近辺を吟行した時の句です。四季折々にふれこの近辺は吟行しております。長屋門、枯山水の寺苑もあり、趣ある処ですので、句材が見つかりやすい。その寺苑に昇る冬月、テレビで放映していた竜安寺と重なり句心が誘われました。